

令和 4 年 5 月 26 日現在

機関番号：34315

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K13515

研究課題名（和文）英語開講講座教育力向上のための指導者支援プログラムの開発と効果の実証

研究課題名（英文）Examine the effectiveness of providing faculty support to improve pedagogy in EMI

研究代表者

小島 直子 (Kojima, Naoko)

立命館大学・政策科学部・准教授

研究者番号：80624890

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はEMIにおける学習意欲を高める効果的な指導方法を明らかにし、その結果をもとにEMI担当教員支援ワークショップを行う予定であった。さらに長期的なEMI教員支援と実証研究による効果検証を重ね、普遍的かつ効果的なEMI教員支援プログラムとEMI指導方法を確立することを目的としていた。およびに関しては予定通り実施した。その一方で、およびについてはコロナ禍の影響を受け実施が困難を極めた。そのため、これらの研究目的の一部変更し、得た結果を書籍として出版する、EMI教員に加えて外国語教育学の研究者および教員とも共有することを通して、より普遍的かつ効果的なEMI教授法を探った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

EMIでは高い教育力が要求されるにもかかわらず、EMIを担当する教員へのサポートはほぼ皆無である。本研究ではEMIで学ぶ難しさ、EMIを担当する負荷の高さを明らかにするだけでなく、英語「で」教えるだけでは英語も科目も学べないことを明らかにし警鐘を鳴らした。さらに教育的介入調査を通し、より効果的な教育的アプローチ追及し、これらの結果を著書、論文や口頭発表を通して発信した。そしてEMI教員、外国語教育学の研究者・教員とさらなるEMIにおける教育力向上を目指して議論を重ねた。今後、ますますEMIが増加する中で現状把握と問題点の明確な理解とその認識を広めることに貢献した。

研究成果の概要（英文）：This project was to 1. Uncover the effective teaching practices to enhance motivation, and 2. offer workshops for EMI instructors based on the results. In addition, the researcher was planning to 3. Support EMI instructors longitudinally and conduct empirical studies to investigate the effectiveness of the support, and 4. Design a FD program for EMI instructors to make their classrooms more student-centered. The first and second objectives of the project were achieved as planned. However, the data collection and making new connections during the COVID-19 epidemic was impossible, so the third and fourth objectives had to be adjusted. Therefore, I published a book about motivation in EMI, including the investigation of pedagogical intervention. Moreover, I shared effective teaching practices in EMI based on the results of studies of the pedagogical intervention with researchers and teachers in applied linguistics and TESOL to discuss further.

研究分野：外国語教育学

キーワード：外国語教育学 EMI 動機づけ 教育的介入

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

英語が国際語としての地位を確立するとともに、英語で授業を行うことが世界的な現象として急速に広まり、外国語教育学の研究者の注目を集めている(例えば Oxford 大学の Center for Research and Development on English Medium Instruction など)。日本でも 2000 年以降、主に大学で専門科目および一般科目を英語で行う英語開講講座(English Medium Instruction、以下 EMI)がより多くの留学生の受け入れと、日本人学生の英語運用能力向上を主な目的として広まっている。特に、日本人学生への教育効果として、学生は英語で科目学習を行う過程で自然に必要な英語力が身につく、その語学力と専門性を活かして国際的に活躍できる人材として成長することが期待された。しかし、世界的なトレンドに遅れをとりまいと多くの大学は信頼性の高い実証研究を待たずして EMI を導入し、現場の教員や学生は混乱し、その効果も明らかになっていない。

本研究申請者はこれまでの研究で、EMI において英語学習意欲が高い学生ほど、EMI のために自主的に勉強し、授業理解度も高いことを明らかにしてきた。そして、これらの結果を踏まえて現在立命館アジア太平洋大学(以下 APU)において EMI 担当教員と協働で英語教育学の視点を取り入れた EMI 教育実践を行い、一定の手応えを得ている。具体的には、英語で学習するスキルの教授、オンラインラーニングシステムを使った学習者サポート、授業内での小グループディスカッションなどを取り入れている。日本人学生からは「英語が苦手で不安だったが、英語教員がサポートしてくれることで頑張ろうと思えた」というような前向きなコメントが寄せられている。さらに、第 1 言語話者及び第 1 言語話者と同等の英語力を持つ学生からも、「英語教員がサポートに入ること、クラスのディスカッションがより意義のあるものとなり今後の授業が楽しみだ」というようなコメントが寄せられ、学生達は EMI における言語サポートに対して非常に肯定的な態度を示していることがわかる。つまり EMI における言語サポートは授業の進度の遅れを招くという EMI 担当教員の懸念とは裏腹に、英語教育学の視点を取り入れた EMI 指導方法が全ての学生の学習意欲を高め、結果として彼らの学びを深める可能性を秘めていることを示唆している。

しかし、今後ますます EMI が広まること、チームティーチングにおける EMI 担当教員及び英語教員双方の負荷の高さを鑑みると、英語教員がアドバイザーとして EMI 担当教員をサポートし、一定期間の EMI 担当教員支援の後、彼らが単独で効果的に EMI を教えられる教員支援プログラムと EMI 指導方法を確立することが必要であると考えられる。

2. 研究の目的

そこで、本研究では、以下の 4 つを研究目的とする。

- 1) 2016 年度に行ったチームティーチングの学生の学習意欲の視点からの効果検証
- 2) EMI 担当教員支援のためのワークショップ開催
- 3) 長期的な EMI 担当教員支援と実証研究による効果検証
- 4) EMI 担当教員が単独で行うことのできる普遍的かつ効果的な EMI の指導方法の確立

- 1) 2016 年度に行ったチームティーチングの学生の学習意欲の視点からの効果検証

現在申請者が APU で実施している井口氏とのチームティーチングでは、その効果を学習意欲の視点から検証するため、指導介入前後の質問紙調査、面接調査に加えて学生からのフィードバックを定期的に収集している。本申請研究では、これらのデータを分析し、どのような指導方法が学生の学習意欲を高めるのかを明確にすることを取っ掛かりとする。

- 2) EMI 担当教員支援のためのワークショップ開催

ワークショップでは、1)の効果検証で有効であると考えられる指導方法の伝授やこれらの取り組みに対する学生からのフィードバックを共有する。このワークショップは英語教員とEMI担当教員の双方の視点から効果的なEMI教育実践に必要な専門知識やティーチングスキルについて協議しながら構築していく。加えて、分野を問わず「英語で教える」ことの難しさに直面している多様な分野のEMI担当教員が情報を共有し、彼らが専門分野の壁を超え、協力的な関係を構築することもワークショップ開催の目標の一つとする。

3) 長期的なEMI担当教員支援と実証研究による効果検証

2)のワークショップに加え、EMI担当教員を長期的かつ定期的に支援することで、より効果的なEMI指導方法の定着を図る。具体的には授業視察に加え、EMI担当教員と授業外で面談などを行い、彼らの迷いや悩みを解消し、スムーズで確実なEMI指導方法の向上を可能にする。加えて、彼らが入力している指導方法の効果検証を行うため、これらのEMIにおいて学生からのフィードバックの収集、面接調査、質問紙調査などからなる量的・質的研究を行う。

4) EMI担当教員が単独で行うことのできる普遍的かつ効果的なEMIの指導方法の確立

3)の結果を踏まえて効果的な指導方法を選別する。その結果を踏まえて2)のワークショップの内容を改善し2)及び3)を再度実施する。複数の教育機関及びEMIでこのプロセスを繰り返すことにより、分野を問わず効果的なEMI指導方法とその実現のための教員支援プログラムを構築する。

3. 研究の方法

本研究はEMIを履修した学生を対象に平成28年に収集したデータの分析を皮切りに、EMI担当教員を対象にしたワークショップの開催、縦断的なEMI担当教員支援、および指導方法の効果検証を継続して計4回研究期間中に行い、普遍的かつ効果的なEMI指導方法と教員支援プログラムの確立を目指す。効果検証は量的研究と質的研究を用いた混合研究方法を用いる。量的研究はデータ収集後多変量解析を行い、質的研究においてはデータの収集・分析・解釈を並行して行う。

チームティーチングの効果検証

2016年度秋学期にAPUで実施しているチームティーチングでは、量的（質問紙）及び質的（教員に対するフィードバックシート、面接など）データを収集しており、2019年度の前半はこれらのデータ分析を中心に行い、教員ワークショップに備える。量的研究は多変量解析を質的研究はグランデッド・セオリ・アプローチの手順を一部用いて分析する。

縦断的なEMI担当教員支援とこれらのEMIにおける効果検証

研究対象 研究対象者は研究協力者およびワークショップに出席したEMI担当教員のEMIを履修している学生である。APUでは200名程度、同志社大学では100名程度、関西大学では100名程度、新規開拓校では50-80名程度を予定している。

研究方法 本研究は、量的研究と質的研究に基づく混合研究方法を用いる。量的研究は質問紙調査を学期始めと終わりに実施しその変化と効果を明らかにする。具体的な項目としてはEMI学習意欲、英語学習意欲、外国語使用不安、英語習熟度、授業理解度、週の自主学習勉強時間などである。質問項目は英語教育学の先行研究で使用されてきた信頼性の高いものをEMI環境に応用して使用する。分析は、データ収集後に多変量解析を行う。質的研究は質問紙実施後の面接調査、フィードバックシートやジャーナル調査などを実施する。グランデッド・セオリ・アプローチなどを用い、データの収集・分析・解釈を並行して行い学生の学習意欲の変化や学生の学びのプロセスに注目し明らかにする。

途中経過・最終成果発表

口頭発表 本研究は国内外で広く発信する。

論文発表 応用言語学、外国語教育学において国際的に高い評価を受けている System や Language Learning などへの投稿を目標とする。口頭発表と同様、より多くの英語教育に携わる研究者や教育者に向けて発信する。

4. 研究成果

研究目的に沿って本研究の成果を報告する。

1) 2016 年度に行ったティームティーチング（教育的介入）の効果検証

2016 年度に 2 つの EMI 科目（Gender Studies, Cultural Studies）で教育的介入を実施し、その前後にアンケート調査（量的データ）を実施した。さらに、介入後には質問紙調査の中から同意した 6 名にインタビュー調査を実施した（質的データ）。いずれも自己決定理論（Self-determination theory, SDT, Deci & Ryan 1985; Ryan & Deci, 2000）を EMI 学習意欲を明らかにするための理論的枠組みとして応用した。質問紙調査では L2 motivational self system の ideal L2 self, ought-to self や英語学習に対する態度などを英語学習意欲を測定する要因として応用した。面接データは調査協力者の了承を得た上で録音された。量的調査では対応のある *t* 検定を実施し統計的な差異を探したが、EMI 全体に対する学習意欲及び英語学習意欲における統計的に有意な差は確認できなかった。

その一方で個人の視点から介入の効果の有無を探るために実施した質的調査からは 1. 留学生との小グループ活動（自律性、有能感、関係性の欲求の充足） 2. オンラインラーニングシステムにおける日本語でのコミュニケーション（自律性、関係性の欲求の充足） 3. オンラインラーニングシステムにおける英語での授業理解度チェック（有能感の欲求の充足）が SDT における心理的 3 欲求の充足に貢献し、学生の学習意欲の維持・向上により貢献したことが分かった。

また、量的調査において統計学的に有意な学習意欲の向上は見られなかったものの、これまでの研究結果（例えば Johnson, 2013; Hayashi, 2012）から、学習意欲は最初が最も高く下降する傾向があることを鑑みると、本教育的介入は、少なくとも学習意欲の維持・向上に一定程度貢献したと考えられる。

2) EMI 担当教員支援のためのワークショップ開催

EMI 教員が参加する数多くのワークショップやシンポジウムで研究成果を発表し議論を重ねた。具体的には 2017 年度には同志社大学における EMI 教員向けシンポジウム、2018 年度には APU における EMI 教員向けワークショップに招待され研究結果とともに、彼らの教育環境を聞き具体的な教育的アプローチについて議論を重ねた。さらに学習院大学で実施された EMI 教員および言語教員・研究者の双方が所属している Integrating content and language in higher education (ICLHE) in East Asia のシンポジウムに招待され、講演を行った

3) 長期的な EMI 担当教員支援と実証研究による効果検証

本目的では当初、本研究者のこれまでの人的ネットワークに加えて、2) のワークショップ等で新しいネットワークを構築し、EMI 担当教員に対して長期的（半年、通年など）に継続的なサポートを提供した上で、彼らの学生からデータを収集し、教育的サポートの効果を測定する予定であった。しかし、2020 年度にはコロナ禍によりオンライン授業への移行を余儀なくされた。また翌 2021 年度はハイブリッドも含め、授業形態も不安定であった。まず学生からデータを集めることが難しく、更にこのような混乱の中で新しい取り組みは EMI 担当教員の負荷をさらに上げる可能性が高く、これらの調査を断念せざるを得なかった。さらに研究者同士も対面で会う機会が非常に限られており、新しい人的ネットワーク作りに関しても

困難を極めた。

- 4) EMI 担当教員が単独で行うことのできる普遍的かつ効果的な EMI の指導方法の確立
本目的は、3)の結果を受けて模索する予定であったため、本目的を変更し、1)で得た研究結果をより幅広く発信し、研究者・教育者との議論を重ねながらより効果的な EMI の指導方法を探ることとした。具体的には、これまでの研究成果を EMI 教員に加え、外国語教育学の研究者及び教員、更には大学院生とも共有した。具体的には 2020 年度の終わりに米国 Gonzaga University において Teaching English for Speakers of Other Languages (TESOL)の大学院の授業において特別講演を行い、言語の授業と EMI における教授法の相違点について議論を重ねた。大学院における特別講演は 2022 年度にもオンラインにて実施した。さらに同大学の Faculty Development にも招かれ日本の EMI の状況と教育的介入について共有し議論を重ねた。他にも 2021 年度には早稲田大学で実施された、英語論文ライティング・ラウンドテーブルにも招かれ、他の EMI 教員、大学院生と共に「英語で研究・教育する意義」について議論を重ねた。さらに、2021 年 3 月にはこれまでの研究結果を収めた著書を出版し国内外の EMI 及び外国語教育学の研究者・教育者に幅広くその結果を発信した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 小島直子	4. 巻 4
2. 論文標題 English-Medium Instruction (EMI)に求められている教育実践および学習環境－日本人学生の動機づけの視点から－	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 APU Journal of Language Research	6. 最初と最後の頁 49-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Kojima Naoko
2. 発表標題 Motivation in English-Medium Instruction: Exploring better Pedagogical Practices from the Perspectives of Self-determination Theory
3. 学会等名 動機づけ研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kojima, N.
2. 発表標題 Motivation of Japanese Students in English-Medium Instruction
3. 学会等名 Integrating Content and Language in Higher Education（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kojima, N.
2. 発表標題 Motivating Japanese students in English-Medium Instruction: From theory to practice
3. 学会等名 At Year-end One-day Cluster Retreat（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小島直子
2. 発表標題 自己決定理論の枠組みから 理解する英語開講講座における課題とその解決策の提案
3. 学会等名 外国語教育メディア学会(LET) 第57回 全国研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Arii, K. & Kojima, N.
2. 発表標題 A talk in the symposium < Challenges of English- Medium Classroom Management in Japanese Universities >
3. 学会等名 A Symposium on Courses Taught in English at Japanese Universities
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kojima, N.
2. 発表標題 Exploring Effective Pedagogical Practices from Motivational Perspectives in English-medium Instruction
3. 学会等名 At Year-end One-day Cluster Retreat at Ritsumeikan Asia Pacific University (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kojima, N.
2. 発表標題 EMI research in Japan: Is Englishnazation the future of Japanese universities?
3. 学会等名 First Friday Forum, Gonzaga University (招待講演)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Naoko Kojima	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 128
3. 書名 Student Motivation in English-Medium Instruction: Empirical Studies in a Japanese University	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------